

# 高校生の意欲と将来の志向性

——活動参加プロセスに着目して——

森 杏菜（東京大学教育学部）

## ■要約

- ◎現在の意欲が高い人ほど、「上昇志向」をもち、現在の意欲が低い人ほど、「ほどほど志向」をもち。
- ◎学校での特別活動（本稿では、委員会役職・クラス委員・ボランティア活動を指す）は、外発的要因によって（＝本人の自発的意思のないままに）経験しても、生徒の意欲の高まりは期待できない。
- ◎外発的要因による役職経験は、高意欲→「上昇志向」、低意欲→「ほどほど志向」という関係を弱める一方、ボランティア活動経験は、意欲と将来の志向性の関係に影響を与えない。

## 1 問題設定

老後に関して、「暮らしていける収入があれば、のんびりと暮らしていきたい」と思っている中高年の方も多いのではないだろうか。そして、彼らがこのように望むことに、世間とはやかく口出ししない。だが日本青少年研究所の『高校生の意欲に関する調査』（2007）によれば、「暮らしていける収入があれば、のんびりと暮らしていきたい」と考えている高校生も最近は増えているようである。しかも、世間には、その現象は最近の高校生に総じて意欲・やる気がないからだとは非難する風潮がある。

では、高校生の意欲は、最初から欠如しているのか。それはわからない。だが、彼らが一日の大半を過ごす学校生活の中で、意欲は高められたり、低められたり、もしくはまったく削がれてしまったりする可能性はあるはずだ。昨今の学習意欲の低下は、授業がつま

らない、わからないせいだと指摘されるのは、その一例だろう<sup>1</sup>。授業だけに限った話ではない。部活動、学校行事、その他特別活動。これらの活動は、経験することで何か得るもの（＝自信・達成感・意欲など）がある、といううたい文句の下、誰もが経験したことがあるだろう。しかしここで、自身の過去を振り返ってみてほしい。やりたくもないのに、やらされた／やらざるをえなかった経験は、やりたくてしょうがないという気持ちで臨んだ経験と同じだけの自信や達成感、意欲をもたらしてくれただろうか。

以上のような世間にあふれている、意欲をめぐる様々な通説に疑問を呈したい、というのが本稿の目的である。

## 2 先行研究レビュー

まず、冒頭に提示した、「暮らしていける収入があれば、のんびりと暮らしていきたい」

であるとか、他にも「偉くなりたくない」という最近の日本の高校生の将来の志向性は、日本青少年研究所の『高校生在意欲に関する調査』（2007）で、米・中・韓の高校生との国際比較によって明らかにされている。これと類似した将来の志向性を、室井研二・田中朗（2003）は、現代の高校生の「学歴＝地位達成」志向の揺らぎ、新たな価値志向の台頭として分析している。ここでの「地位達成志向」とは、中長期的な目標、社会的上昇意欲、仕事本位主義といった、広義の「地位」に対する積極度を総合した志向性を示す。これと同時に、「地位達成志向」からの揺らぎとして、「脱地位達成志向」を提示している。この傾向として、積極的に私生活を充実させようとする層と、社会とのかかわりに対して全般的に消極的な層の2つの位相が確認できる、とした。そしてこの「地位達成志向」は、千石保（1991）のいう「まじめ」と同義であるという。千石は若者のあいだで、「まじめ」が崩壊していることに危機感を抱き、「若者たちは頑張る気持ちがあるのだろうか。残念ながら、昇進しようという意欲はきわめて薄弱である」（千石 1991: 47-8）と述べている。

ここで気になる点が2点ある。1点めは「地位達成志向」など、上昇することこそが望ましい志向性であるという論調、2点めは将来の志向性と意欲・頑張る気持ちが、常に連動しているという前提である。先行研究では、この論調と前提はもはや当たり前のものと見なされているが、高校生のリアリティに迫るには、今一度これらが当たり前のものなのかどうかから検討する必要があると本稿では考える。

次に、若者の日々の意欲に関する先行研究を見てみる。松井洋（1999）は、米・中・韓など6か国と日本との国際比較によって、「何かをしたいという意欲も元気もない」という問いに肯定する高校生が他国と比べ日本にはかなり多く、「努力」や「意欲」というような前向きに生きようという価値観が欠けている、という知見を出している。中央教育審議会（以

下、中教審とする）の「青少年の意欲を高め、心と体の相伴った成長を促す方策について（中間まとめ）」（2006年9月28日発表）でも、成長の糧となる様々な試行錯誤に取り組もうとする意欲（＝自立への意欲）が青少年のあいだで減退していることが懸念されている。

それでは、以上のような上昇する志向性や、「努力」や「意欲」など前向きに生きようとする価値観はどのように培われるのか。これについて最近声高に言われているのは、学校で行われる部活動、学校行事、委員会活動などの特別活動である。これらの活動の教育的意義は、学習指導要領にも高々と掲げられている。個性の伸長、よりよい生活を築こうとする自主的・実践的態度、自己を生かす能力の養成。特別活動を通して、こうしたよい効果が生徒たちに付与されるという。この特別活動の一環でもあり、近年注目されているのが、ボランティア活動である。相原次男・新富康央（2001）は「（ボランティア）活動が子どもの人間関係能力や社会性の育成、また優しさや思いやりなど心の教育に果たす役割の大きさは誰もが認めるところである」（相原・新富編著 2001: 13）と述べている。教育再生会議の第一次報告（2007年1月24日発表）でも、「全ての子どもに規範を教え、社会人としての基本を徹底する」ために高校での「奉仕活動」必修化が提言されている。そして、今回の調査対象である都立高校では、2007年度からそのボランティア活動が「奉仕」という教科・科目として必修化された。そこには、規範意識や自己肯定感の低下、ニートの増加を解決すべき課題と掲げ、前述のボランティア活動の効用を挙げたうえで、活動の成果がごく一部の学校、生徒にとどまっている現状を鑑みて、東京都教育委員会（以下、都教委とする）が必修化・全校実施に踏み切った、という経緯がある（都教委ホームページ）

1 たとえば教育再生会議第二次報告（2007年6月1日発表）では、提言として「すべての子どもにとって分かりやすく魅力ある授業」の展開を掲げている。

ジ「平成19年度奉仕体験活動の必修化に向けて」より)。

ここにも1つ気になる点がある。特別活動などを経験させさえすれば、生徒たちにより効果が付与されるだろうという前提である。この前提も、一度きちんと検証してみる必要があるだろう。ただし本稿は、特別活動やボランティア活動そのものの意義を疑うものではない。生徒の自発的意思を伴わない活動に、はたして意義は見出せるのか、ということに注目したいのである。

### 3 仮説の設定

以上の先行研究レビューを踏まえて、以下で本稿が検討する仮説を提示する。それにあたり、将来の志向性についての概念を改めて整理しておく。まず「のんびり暮らしたい」と思っている、世間的に「望ましくない」「脱地位達成志向」とも称される人たちを、「ほどほど志向」と呼ぶことにする。ほどほどの給料のもと、ほどほどのステイタスに満足し、ごく普通の生活を営む、というニュアンスである。また、「ほどほど志向」と対比させる意味で、「地位達成志向」と類似の特徴をもつ志向性を、「上昇」というキーワードを参考に、「上昇志向」と表すことにする。そのうえで、まず「ほどほど志向」＝意欲の欠如という通説が真なのかどうかを検証する。

表3-1 「ほどほど得点」の度数分布表

ほどほど得点	度数
4	6
5	4
6	16
7	53
8	92
9	155
10	374
11	292
12	230
13	149
14	60
15	22
16	19

### ●理論仮説1

現在の意欲の高低は、将来の志向性と連動している。

「上昇志向／ほどほど志向」を表す指標として、「ほどほど得点」を作成する。これは、Q45A「社会的な地位や名誉のある人間になりたい」、同B「暮らしていける収入があればのんびり暮らしたい」、同C「他人に負けないようがんばり続けたい」、同D「多少退屈でも平穏な生涯を送りたい」という4つの変数<sup>2</sup>を、「ほどほど志向」の人ほど高得点になるようにそれぞれに1～4点の得点を割り当て、合成したものである<sup>3</sup>。この得点は4点(「上昇志向」の強い人)から16点(「ほどほど志向」の強い人)まで分布する。表3-1に「ほどほど得点」の度数分布表を示す。平均値10.71、標準偏差1.95の分布となる。そこで、4～10点を「上昇志向」、11～16点を「ほどほど志向」と2段階に分けて、本稿では扱うこととする。また意欲の高低に関しては、Q34G「うまくいくかわからないことにも意欲的に取り組む」を「まあ／あまり」間で二分し、「とても＋まああてはまる」を「意欲的」、「あまり＋まったくあてはまらない」を「意欲的でない」とする。

### ●作業仮説1

うまくいくかわからないことにも意欲的に取り組んでいる人ほど「上昇志向」をもち、意欲的に取り組んでいない人ほど「ほどほど志向」をもつ。

これについて本稿が検証する通説は、学校での特別活動を「やらされた」経験は、「やりたくてやった」経験と同じだけの意義や効用をもたらすかどうか、である。ただ、先行研究レビューでも挙げたとおり、この意義や効用は多岐にわたるためすべてを検証することは不可能である。そのため本稿では、「意欲の高まり」にしぼって検証を行うこととする。

## ●理論仮説 2

活動参加経験が外発的要因による場合でも、自発的要因による場合と同程度に高い意欲をもつようになる。

今回は、活動経験の有無による意欲の高まりと、自発／外発の違いによる意欲の高まりの両者を検証するために、経験の有無にばらつきがあると考えられる、役職経験（具体的には委員会活動・クラス委員）と、ボランティア活動<sup>4</sup>を分析対象とする。

### ●作業仮説 2-1

気がすすまなかったが役職をひきうけた経験のある人でも、すすんでひきうけた経験のある人と同じくらい、何事にも意欲的に取り組む。

### ●作業仮説 2-2

自分の意思と無関係に学校を通してのボランティア経験がある人でも、興味があって参加した経験のある人と同じくらい、何事にも意欲的に取り組む。

さらに、この理論仮説 1、2 が支持されれば、将来の志向性についても同様に次のような仮説を立てることが可能である。

## ●理論仮説 3

活動参加経験が外発的要因による場合でも、自発的要因による場合と同程度に「上昇志向」をもつようになる。

### ●作業仮説 3-1

気がすすまなかったが役職をひきうけた経験のある人でも、すすんでひきうけた経験のある人と同じくらい、「上昇志向」をもつ。

### ●作業仮説 3-2

自分の意思と無関係に学校を通してのボランティア経験がある人でも、興味があって参加した経験のある人と同じくらい、「上昇志

向」をもつ。

## 4 仮説の検証

### 4.1 誰が「ほどほど志向」なのか

作業仮説 1 の検証に入る前に、基本情報でもある、誰が「上昇志向／ほどほど志向」をもっているのか、についてははじめに確認しておく。「男女」と「高校グループ（ABC の 3 段階）」を各々独立変数、「ほどほど得点」を従属変数にして、二重クロス表を作成したところ、次のような結果が得られた（表は省略）。

第一に、「ほどほど志向」は男子で 46.6%、女子で 58.5% となった（危険率 0.1% で有意  $p=0.000$ ）。

第二に、ABC すべてのグループにおいて、「ほどほど志向」>「上昇志向」となった。また、グループの各ポイント差は有意な差ではなく（ $p=0.420$ ）、高校グループによる将来の志向性の違いは確認できなかったと言える。

一般的な考えとして、男子のほうが女子に比べて出世欲が高いなど、地位達成に積極的なイメージが想像しやすい。それゆえ、二重クロス表で得られた結果は、この一般論に合致すると言えるだろう。ただ、男子のほうが地位達成に積極的ではあるものの、46.6% が「ほどほど志向」の傾向を示したのは、留意すべき事柄ではないだろうか。

同様に、一般的に上位校のほうが、出世欲の高い生徒が多いのではないかと考えられよう。だが、得られた結果から、この考えは現実にはあてはまらないことが示され、

2 これら 4 つの変数については、室井・田中 (2003) の調査と、日本青少年研究所 (2007) の調査で使用された質問項目を参照した。

3 この 4 つの変数を合成するにあたって、Cronbach の  $\alpha$  は 0.913 という高い値を示したので、合成することには妥当性があると判断してよい。

4 「すべての都立高で必修化された」と述べたが、これは調査時点では 1 年生に限定される。つまり、今回の調査対象である 2 年生は、必ずしも経験者ばかりではないということである。実際に中・高を通して未経験と回答した生徒は、全体で 32.9% 存在した。

「ほどほど志向」とは、現代の高校生に高校グループを問わず出現している志向性であることが示唆された。このことから、今まで批判的ではなかった彼らを、きちんと取り上げる必要があるのではないだろうか。

#### 4.2 作業仮説1の検証～意欲の高低と将来の志向性の関係について

つづいて、作業仮説1の検証に入る。Q34 G「うまくいくかわからないことにも意欲的」を独立変数、「ほどほど得点」を従属変数にして、二重クロス表を作成したところ、表3-2のようになった。

「意欲的でない」と答えた人のうち、「ほどほど志向」の人は58.8%、逆に「意欲的」と答えた人のうち、「ほどほど志向」の人は44.8%で、14.0ポイントの差が確認できた。つまり、通説どおり、意欲の欠如＝「ほどほど志向」という図式が成立していることがわかる。よって、作業仮説1は支持された。

#### 4.3 作業仮説2-1の検証～外発的要因による役職経験が意欲の高低に与える影響

Q23 B、C「役職経験」を独立変数、Q34 G「うまくいくかわからないことにも意欲的」を従属変数にして、二重クロス表を作成した。ここで、使用した変数の扱いについて、いくつか注記を加える。Q23では、B「委員会活動の委員長や副委員長」、C「クラス委員」以外に、A「生徒会の役員」、D「部活動の部長や副部長」についても質問しているが、本稿ではA、Dには言及しない。A「生徒会の役員」は経験者が全体でも20.1%と非常に

少なく、サンプルが限定されすぎるため、またD「部活動の部長や副部長」は身体的能力や技術レベルの高さなども含んだ選出が行われる可能性が大きいため、本稿のねらいからやや外れる、と判断した。もう1つ、Q23の各質問には、4とおりの回答パターンを提示したが、本稿では3「調査書などでよい評価を得るためになった」と回答した人を分析から除外して話を進める。高校生の学校生活によりリアルに迫りたい、という思惑から3「調査書のため」を設定したが、こちらも本稿の問題関心からは外れている。しかも、A～Dどれをとっても3の回答者は10%に満たない。以上の理由で3を除外することとする（次項の作業仮説2-2で使用するQ24も同じ理由で3を除外した）。これらを踏まえて作成した二重クロス表が表3-3、4である。

「意欲的」と答えた人の割合の高い順に並べると、表3-3、4ともに、「すすんでひきうけた」>「気がすすまなかったがひきうけた」>「経験していない」となった。各ポイント差はすべて有意な差である。つまり、役職に関しては自発的／外発的にかかわらず経験することで、未経験者よりも意欲が高まるということが示唆された。

ここまでで、活動経験の有無による効用が確認できた、ということになる。ただし、注目すべきは「すすんでひきうけた」人と「気がすすまなかったがひきうけた」人とのポイント差である。委員会活動役職は17.7ポイント、クラス委員も17.0ポイントの大きな差が、「意欲的」の回答において確認できる。よって、作業仮説2-1は支持されなかった。

表3-2 「ほどほど得点」×「うまくいくかわからないことにも意欲的」

Q45A~D×Q34G

		ほどほど得点		合計	N
		上昇志向	ほどほど志向		
意欲的	意欲的 (%)	55.2	44.8	100.0	649
	意欲的でない (%)	41.2	58.8	100.0	806
	合計 (%)	47.4	52.6	100.0	1,455

危険率0.1%で有意 p=0.000 オッズ比1.76

表3-3 「うまくいくかわからないことにも意欲的」×「委員会活動役職経験」

Q34G×Q23B

		意欲的		合計	N
		意欲的	意欲的でない		
委員会活動 役職経験	すすんでひきうけた (%)	62.3	37.7	100.0	326
	気がすすまなかった がひきうけた (%)	44.6	55.4	100.0	327
	経験していない (%)	35.5	64.5	100.0	708
	合計 (%)	44.1	55.9	100.0	1,361

危険率0.1%で有意 p=0.000

表3-4 「うまくいくかわからないことにも意欲的」×「クラス委員経験」

Q34G×Q23C

		意欲的		合計	N
		意欲的	意欲的でない		
クラス委員 経験	すすんでひきうけた (%)	62.9	37.1	100.0	294
	気がすすまなかった がひきうけた (%)	45.9	54.1	100.0	279
	経験していない (%)	36.5	63.5	100.0	788
	合計 (%)	44.2	55.8	100.0	1,361

危険率0.1%で有意 p=0.000

#### 4.4 作業仮説2-2の検証～外発的要因によるボランティア経験が意欲の高低に与える影響

作業仮説2-1と同じ手順を踏んで、独立変数Q24「ボランティア活動経験」、従属変数Q34G「うまくいくかわからないことにも意欲的」の二重クロス表を作成した(3「調査書などでよい評価を得るために参加した」は除外した)。それが表3-5である。

表3-5より「意欲的」と答えた人の割合の高い順に並べると、「もともと興味があって参加した(59.4%)」>「全員参加することになっていて参加した(42.6%)」>「参加したことはない(39.0%)」となった。前者2つのポイント差は有意な差であった。つまり、「もともと興味があって参加した」人と「全員参加することになっていて参加した」人との間には、「意欲的」の回答に大きな差(16.8ポイント)が確認できるということが言える。よって、作業仮説2-2は支持されなかった。

以上の結果から、たしかに学校での特別活動は経験しないよりは、経験したほうが「意欲の高まり」という効用は得られる。しかし、そこに本人の自発的な意思や興味・関心が介在せず、外発的な無理強い・おしつけの経験であった場合には、その効用は減退してしまうということが確認された。

#### 4.5 作業仮説3-1の検証～外発的要因による役職経験が将来の志向性に与える影響

Q23B、C「役職経験」を独立変数、「ほどほど得点」を従属変数にして、二重クロス表を作成したところ、表3-6、7が得られた。

表3-6より、「上昇志向」と答えた人の割合の高い順に並べると、「すすんでひきうけた(53.1%)」>「経験していない(45.5%)」>「気がすすまなかったがひきうけた(43.8%)」となった。前者2つのポイント差は有意な差

である。つまり、外発的要因によって委員会活動役職を経験した人は、自発的に経験した人と比べると、「上昇志向」をもたないと言える。

表3-7より、「上昇志向」と答えた人の割合の高い順に並べると、「すすんでひきうけた(54.5%)」>「気がすすまなかったがひきうけた(46.7%)」>「経験していない(43.9%)」となった。前者2つのポイント差は有意な差である。これより、クラス委員の場合も同様に、外発的要因によって経験した人は、自発的に経験した人と比べると「上昇志向」をもたないと言える。

よって、表3-6、7より仮説3-1は支持されなかった。

#### 4.6 作業仮説3-2の検証～外発的要因によるボランティア経験が将来の志向性に与える影響

独立変数Q24「ボランティア活動経験」、従属変数「ほどほど得点」の二重クロス表を作成したところ、表3-8のようになった。

表3-8より、「もともと興味があって参加した」「全員参加することになっていて参加した」「参加したことはない」の間の各ポイント差は有意な差ではないことがわかった。よって、作業仮説3-2は支持されなかった。

ここで、疑問が生じることとなる。作業仮説1-2-2の結果を踏まえると、外発的要因によって役職やボランティアを経験した人は、経験していない人に比べれば「上昇志向」を強くもっているはずである。しかし実際には、その傾向が見出せず、さらに、表3-8では経験の有無や、経験のプロセスによる将来の志向性の違いは確認できなかった。この疑問は、次節で新たな仮説として提示することにしよう。

表3-5 「うまくいかわからないことにも意欲的」×「ボランティア活動経験」

Q34G×Q24

		意欲的		合計	N
		意欲的	意欲的でない		
ボランティア活動経験	もともと興味があって参加した (%)	59.4	40.6	100.0	266
	全員参加することになっていて参加した (%)	42.6	57.4	100.0	524
	参加したことはない (%)	39.0	61.0	100.0	495
	合計 (%)	44.7	55.3	100.0	1,285

危険率0.1%で有意 p=0.000

表3-6 「ほどほど得点」×「委員会活動役職経験」

Q45A～D×Q23B

		ほどほど得点		合計	N
		上昇志向	ほどほど志向		
委員会活動役職経験	すすんでひきうけた (%)	53.1	46.9	100.0	320
	気がすすまなかったがひきうけた (%)	43.8	56.3	100.0	320
	経験していない (%)	45.5	54.5	100.0	692
	合計 (%)	46.9	53.1	100.0	1,332

危険率5%で有意 p=0.034

表3-7 「ほどほど得点」×「クラス委員経験」

Q45A～D×Q23C

		ほどほど得点		合計	N
		上昇志向	ほどほど志向		
クラス委員経験	すすんでひきうけた (%)	54.5	45.5	100.0	292
	気がすすまなかったがひきうけた (%)	46.7	53.3	100.0	270
	経験していない (%)	43.9	56.1	100.0	772
	合計 (%)	46.8	53.2	100.0	1,334

危険率1%で有意 p=0.009

表3-8 「ほどほど得点」×「ボランティア活動経験」

Q45A～D×Q24

		ほどほど得点		合計	N
		上昇志向	ほどほど志向		
ボランティア活動経験	もともと興味があって参加した (%)	49.0	51.0	100.0	257
	全員参加することになっていて参加した (%)	46.5	53.5	100.0	508
	参加したことはない (%)	48.3	51.7	100.0	489
	合計 (%)	47.7	52.3	100.0	1,254

有意差なし p=0.757



## 5 新たな仮説の設定・検証

### 5.1 新たな仮説の設定

作業仮説3-1、2の検証で生じた疑問から、次のような新たな仮説を設定する。

#### ●理論仮説4

過去の外発的要因による活動参加経験は、理論仮説1（高意欲→「上昇志向」、低意欲→「ほどほど志向」）の関係を弱めるように働く。

ここまでの知見を再度確認すると、まず、意欲の高低と将来の志向性は連動している。次に、意欲の高低に関しては、表3-3～5より外発的要因による活動参加経験者と未経験者の違いは明確である。一方、将来の志向性になると、表3-6～8より外発的要因による活動参加経験者と未経験者の違いは、必ずしも意欲の高低と同様の傾向を示さない。つまり、理論仮説1で示された関係を弱めるような力を、外発的要因による活動参加経験がもっている、と考えられる。

#### ●作業仮説4-1

気がすすまなかったが役職をひきうけた経験は、作業仮説1（何事にも意欲的→「上昇志向」、意欲的でない→「ほどほど志向」）の関係を弱める。

#### ●作業仮説4-2

自分の意思と無関係の学校を通してのボランティア経験は、作業仮説1（何事にも意欲的→「上昇志向」、意欲的でない→「ほどほど志向」）の関係を弱める。

### 5.2 作業仮説4-1の検証～外発的要因による役職経験が意欲と将来の志向性の関係に与える影響

ここでは、Q34G「うまくいくかわからないことにも意欲的」を独立変数、「ほどほど得点」を従属変数に、Q23B、C「役職経験」を統制変数に入れた三重クロス表を作成し、表3-9、10とする。

表3-9、10に共通する特徴として、意欲的で「上昇志向」と答えた人の割合の高い順に並べると、「すすんでひきうけた」>「経験していない」>「気がすすまなかったがひ

表3-9 「ほどほど得点」×「うまくいくかわからないことにも意欲的」×「委員会活動役職経験」

Q45A～D×Q34G×Q23B

委員会活動 役職経験			ほどほど得点		合計	N
			上昇志向	ほどほど志向		
すすんでひき うけた	意欲的	意欲的 (%)	60.4	39.6	100.0	197
		意欲的でない (%)	40.8	59.2	100.0	120
		合計 (%)	53.0	47.0	100.0	317
危険率1%で有意 p=0.001 オッズ比2.21						
気がすすまな かったがひき うけた	意欲的	意欲的 (%)	50.3	49.7	100.0	143
		意欲的でない (%)	38.9	61.1	100.0	175
		合計 (%)	44.0	56.0	100.0	318
危険率5%で有意 p=0.042 オッズ比1.59						
経験していな い	意欲的	意欲的 (%)	54.3	45.7	100.0	245
		意欲的でない (%)	40.3	59.7	100.0	437
		合計 (%)	45.3	54.7	100.0	682
危険率1%で有意 p=0.001 オッズ比1.76						

きうけた」となったことが挙げられる。

次に、それぞれの表について検討する。まず表3-9についてだが、「気がすすまなかったがひきうけた」人に注目すると、危険率5%で有意な差が確認され、高意欲→「上昇志向」、低意欲→「ほどほど志向」という関係は維持されていることがわかる。だが、オッズ比も同時に確認すると、表3-2（「ほどほど得点」×「うまくいくかわからないことにも意欲的」）では1.76を示していたが、表3-9では1.59となっており、その差は0.17とけっして大きくはないが、それでも下がっていることが確認できた。つまり、委員会活動役職経験で統制することで、作業仮説1で示された関係の結びつきの強さが若干ではあるが、弱められたと言える。

表3-10についても同様に見てみる。「気がすすまなかったがひきうけた」人に注目すると、有意な差は得られなかった。つまり、意欲の高低と将来の志向性が連動しているとは言えない、ということである。オッズ比も確認すると、1.16となっており、表3-2で得られたオッズ比1.76から0.60ポイントも下がっている。ここからも、作業仮説1で示さ

れた関係の結びつきの強さが弱められた、と言える。よって、作業仮説4-1は支持された。

### 5.3 作業仮説4-2の検証～外発的要因によるボランティア経験が意欲と将来の志向性の関係に与える影響

Q34G「うまくいくかわからないことにも意欲的」を独立変数、「ほどほど得点」を従属変数に、Q24「ボランティア活動経験」を統制変数に入れた三重クロス表を作成し、表3-11とする。

表3-11より、「全員参加することになって参加した」人は、危険率1%で有意な差が確認され、高意欲→「上昇志向」、低意欲→「ほどほど志向」という関係は維持されていることがわかる。加えて、オッズ比を確認したところ、表3-2で示されたオッズ比1.76とほぼ同じ1.72という値が得られた。つまり、ボランティア活動経験で統制しても、高意欲→「上昇志向」、低意欲→「ほどほど志向」という関係の結びつきの強さは変化しなかった、ということである。よって、作業仮説4-2は支持されなかった。

表3-10 「ほどほど得点」×「うまくいくかわからないことにも意欲的」×「クラス委員経験」

Q45A～D×Q34G×Q23C

クラス委員 経験			ほどほど得点		合計	N
			上昇志向	ほどほど志向		
すすんでひき うけた	意欲的	意欲的 (%)	60.2	39.8	100.0	181
		意欲的でない (%)	44.9	55.1	100.0	107
		合計 (%)	54.5	45.5	100.0	288
	危険率5%で有意 p=0.014 オッズ比 1.86					
気がすすまな なかったがひき うけた	意欲的	意欲的 (%)	48.4	51.6	100.0	126
		意欲的でない (%)	44.8	55.2	100.0	143
		合計 (%)	46.5	53.5	100.0	269
	有意差なし p=0.624 オッズ比 1.16					
経験していな い	意欲的	意欲的 (%)	52.3	47.7	100.0	281
		意欲的でない (%)	38.6	61.4	100.0	479
		合計 (%)	43.7	56.3	100.0	760
	危険率0.1%で有意 p=0.000 オッズ比 1.74					

表 3-11 「ほどほど得点」×「うまくいくかわからないことにも意欲的」×「ボランティア活動経験」

Q45A~D×Q34G×Q24

ボランティア活動経験			ほどほど得点		合計	N
			上昇志向	ほどほど志向		
もともと興味があって参加した	意欲的	意欲的 (%)	54.5	45.5	100.0	154
		意欲的でない (%)	40.6	59.4	100.0	101
		合計 (%)	49.0	51.0	100.0	255
	危険率 5% で有意 p=0.031 オッズ比 1.75					
全員参加することになっていて参加した	意欲的	意欲的 (%)	54.2	45.8	100.0	216
		意欲的でない (%)	40.7	59.3	100.0	290
		合計 (%)	46.4	53.6	100.0	506
	危険率 1% で有意 p=0.003 オッズ比 1.72					
参加したことはない	意欲的	意欲的 (%)	55.8	44.2	100.0	190
		意欲的でない (%)	43.0	57.0	100.0	291
		合計 (%)	48.0	52.0	100.0	481
	危険率 1% で有意 p=0.007 オッズ比 1.67					

#### 5.4 「ほどほど志向」の人とはどのような人なのか

ここまで4つの仮説を提示して、外発的要因による活動参加経験—意欲—将来の志向性、この三者の関係を多角的に捉えてきた。最後に、本稿でキーワードとして幾度となく挙げてきた「ほどほど志向」の人たちの特徴について言及したい。彼らは本当に、ただ意欲・やる気のない人間でしかないのだろうか。ここでもう一度、先行研究レビューで挙げた室井・田中（2003）を参照する。室井・田中は、「脱地位達成志向」（本稿でいう「ほどほど志向」とほぼ同義と捉える）が、積極的に私生活を充実させることに基調を置いているが、少なからず公共性志向が含まれていることを明らかにしている。ここでいう公共性志向とは、「社会のためにつくす」生き方に重きを置いている、ということだという。

一口に「社会のためにつくす」とは言っても、様々な要素を含むと考えられる。ただ本稿では、「社会をよくする」という観点、すなわち、「ほどほど志向」の人が現代社会で問題とされている事象をこのままではいけないと考えているのではないか、という切り口

で分析を試みる。具体的には、自己責任という名目で格差がそのまま放置され、競争における敗者が切り捨てられる現代社会をおかしいと感じているかどうか、を検証する。よって、検証する仮説は以下ようになる。

#### ●理論仮説 5

「ほどほど志向」の人は、競争における敗者の切り捨てを是認しない社会意識をもっている人たちである。

#### ●作業仮説 5

「ほどほど志向」の人は、社会に出てからの人との競争は当然だとは思っておらず、格差は是正すべきだと考えている。

#### 5.5 作業仮説5の検証～「ほどほど志向」の社会意識

「ほどほど得点」を独立変数、Q38B「政府は格差を縮めるべき」、Q38D「競争は当然だ」を各々従属変数にして、二重クロス表を作成したところ、表 3-12、13のようになった。Q38Bに関しては、「とてもそう思う」と答えた人を肯定的回答（「そう思う」）、

「まあそう思う」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」と答えた人を「それ以外」として二分する。Q38Bの回答が「とても」が36.7%、「まあ」が39.7%に上り、肯定的回答に偏りが生じているため、このような分け方をする。Q38Dは、「まあ／あまり」間で二分し、「とても＋まあ」を「そう思う」、「あまり＋まったく」を「そう思わない」とした。

表3-12より、「政府は格差を縮めるべき」に肯定的な回答をした人は、「上昇志向」33.6%、「ほどほど志向」42.0%となり、8.4ポイント差が確認できた。つまり、「ほどほど志向」の人のほうが、昨今話題となってい

る格差を、自己責任論に帰すのではなく、政府が対処すべき問題と捉えている、ということである。

表3-13より、「競争は当然だ」に肯定的な回答をした人は、「上昇志向」69.9%、「ほどほど志向」54.1%となり、15.8ポイント差が確認できた。つまり、「ほどほど志向」の人のほうが、競争によって勝者と敗者が決まる弱肉強食的な社会があるべき姿だ、と当然視せず、そこに疑問を感じている、ということである。

よって、以上の結果より作業仮説5は支持された。

表3-12 「政府は格差を縮めるべき」×「ほどほど得点」

		政府は格差を縮めるべき		合計	N
		そう思う	それ以外		
ほどほど得点	上昇志向 (%)	33.6	66.4	100.0	694
	ほどほど志向 (%)	42.0	58.0	100.0	765
	合計 (%)	38.0	62.0	100.0	1,459

危険率1%で有意 p=0.001

表3-13 「競争は当然だ」×「ほどほど得点」

		競争は当然だ		合計	N
		そう思う	そう思わない		
ほどほど得点	上昇志向 (%)	69.9	30.1	100.0	697
	ほどほど志向 (%)	54.1	45.9	100.0	764
	合計 (%)	61.6	38.4	100.0	1,461

危険率0.1%で有意 p=0.000

## 6 結論

### 6.1 結論とまとめ

本稿の目的を再度振り返っておくと、それは世間にあふれる、意欲をめぐる通説に疑問を呈することであり、ここでは①「意欲－将来の志向性」と、②「活動参加経験－意欲・将来の志向性」という2つの軸から迫った。そこで、はじめに2つの通説を仮説として提示し、分析を試みた。結果より、高意欲→「上昇志向」、低意欲→「ほどほど志向」という連動関係は、単に世間でそう信じられているだけではなく、否定できない、明らかな関係として示された（仮説1）。

次に、学校での特別活動はプロセスに関係なくとにかく経験させさえすれば、生徒の意欲を高める、というのは誤った認識であることが示された。おしつけや強制など、外発的要因による経験をすることで、たしかにまったく経験しないよりは生徒の意欲の高まりが期待できるが、自発的に経験したときほど高い意欲は望めない（仮説2）。ここまでの検証結果を踏まえると、「上昇志向」になる人を順に並べると、「自発的な経験者」>「外発的要因による経験者」>「未経験者」となると予想される。しかし実際はこのとおりでなく、特別活動に参加したからといって、必ずしも「上昇志向」になるわけではなかった（仮説3）。

つづいて、①②軸を結合させて、「活動参加経験－意欲－将来の志向性」という三者の関係を捉えた。外発的要因による役職経験は、高意欲→「上昇志向」、低意欲→「ほどほど志向」という強固な結びつきの関係を弱める。一方、ボランティア活動経験は、意欲の高低と将来の志向性の関係に影響を与えないこともわかった（仮説4）。

以上のことから、活動参加経験は生徒の意欲と将来の志向性の両方を同時に高めるわけではなく、別々に影響を与えていると言える。つまり、経験によって意欲だけが高まり、将来の志向性は「ほどほど志向」をもつ生徒が

いる一方、経験によって意欲は高められなかったが「上昇志向」はもつようになった生徒もいるということである。そう考えると、たしかに仮説1で意欲と将来の志向性の連動が確認されたが、意欲と将来の志向性を同じ土俵で議論するのではなく、きちんと分けたうえで、意欲と将来の志向性のどちらを高めたいのかを熟慮し、教育方法を考えていく必要があるだろう。特に、様々な活動に強制的に参加させることが、もともと存在した意欲と将来の志向性との関係を弱める場合さえあるということは、昨今の特別活動称揚ブームに対して改めて問い直す必要があることを示唆している。

そして、ここまで意欲欠如＝「ほどほど志向」として否定的なイメージで語られてきたが、その前提とされたイメージに疑問を投げかけるために、「ほどほど志向」の人が、競争における敗者が切り捨てられる現状を是認してはいけない、と考えていることを提示した（仮説5）。

この結果も併せて言及したいことがある。たしかに、高校生の意欲を高めたほうが望ましいという風潮を一概に否定することはできない。そして実際に特別活動を体験することで、経験しないよりは意欲が高まることが確認されたのだから、特別活動の位置づけや実施方法を見直す等、方策を立てることは可能だろう。だが、将来の志向性にまで介入して、高校生を「上昇志向」へ向かわせる必要は必ずしもないのではないのか。生活していけるだけの給料を得ることさえ難しかったり、「ほどほど」の生活さえも手に入りにくいという現実問題が少なからずある中で、高校生はもがいているのではないだろうか。そのような彼らに、先の『高校生の意欲に関する調査』をはじめ、世間が「上昇しろ」と叱咤激励しているが、そうした姿勢そのものが無前提に是認されるべきではない、ということの本稿の結果は示しているのではないのか。

## 6.2 「奉仕」必修化への提言

最後に「奉仕」必修化にも触れておく。調査対象が都立高校生であるため、都立高ならではの政策にも注目したいという思いから、「奉仕」科目と関連するボランティア活動参加経験を分析に盛り込んだ。だが、これまで再三述べてきたとおり、「全員参加することになっていて参加した」＝必修化によってやむを得ず経験するのでは、興味・関心の下で自発的にボランティアを経験する場合に比べれば、生徒の意欲を高める効果はない。そうであるならば、「奉仕」科目を効果的に行う＝(必修という条件下であっても)奉仕活動への参加の自発性を促すにはどうすればよいのかを考えていくべきだろう。私が提案したいのは、「奉仕」活動そのものを単に経験

させるだけではなく、活動への興味や関心を引き起こす準備や事前学習のような時間を活動に入る前に取り入れる、ということだ。

仮説2を設定したとき、脚注4で中・高とおしてのボランティア活動未経験者が全体で32.9%いたことに触れたが、2003年度から全都立高校で「ボランティアの日」が設定されており、何らかの形でボランティア活動に触れる機会はあったはずである。にもかかわらず32.9%の生徒がボランティア活動を経験したことがないと回答しているということは、都教委・学校側と生徒側の意識にずれが生じているのではないだろうか。その意味でも、まずは「ボランティア活動とは何か」をきちんと教え、生徒の意識を改革していくところから始める必要があるのではないかと考える。

### <引用文献>

- 相原次男・新富康央編著、2001、『個性をひらく特別活動』ミネルヴァ書房。
- 中央教育審議会、2006、「青少年の意欲を高め、心と体の相伴った成長を促す方策について（中間まとめ）」  
([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/06112713.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/06112713.pdf), 2008.2.26)。
- 教育再生会議、2007、「社会総がかりで教育再生を——公教育再生への第一歩 第一次報告」  
(<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouiku/houkoku/honbun0124.pdf>, 2008.2.26)。
- 、2007、「社会総がかりで教育再生を——公教育再生に向けた更なる一歩と『教育新時代』のための基盤の再構築 第二次報告」  
(<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouiku/houkoku/honbun0601.pdf>, 2008.2.26)。
- 松井洋、1999、「日本の中学生・高校生の価値観に関する研究——日本、アメリカ、中国、韓国、トルコ、キプロス、ポーランドとの国際比較研究」『川村学園女子大学研究紀要』10(1): 131-53。
- 文部科学省、1999、『高等学校学習指導要領』  
([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shuppan/sonota/990301d.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301d.htm), 2008.2.26)。
- 室井研二・田中朗、2003、「高校生の学歴＝地位達成志向——その現状と展望」友枝敏雄・鈴木謙編著『現代高校生規範意識——規範の崩壊か、それとも変容か』九州大学出版会、69-102。
- 日本青少年研究所、2007、『高校生の意欲に関する調査——日本・アメリカ・中国・韓国の比較』  
(概要は <http://www1.odn.ne.jp/youth-study/research/2007/gaiyo2.pdf>, 2008.2.26 で閲覧可能)。
- 千石保、1991、『「まじめ」の崩壊——平成日本の若者たち』サイマル出版会。
- 東京都教育委員会、2004、「平成19年度奉仕体験活動の必修化に向けて」  
(<http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/buka/shidou/houshi.htm>, 2008.2.26)。